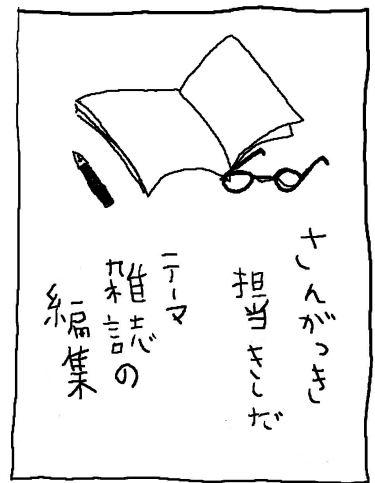


| | |
|--------------|---|
| Title | 小冊子を編集する |
| Author(s) | 岸田, 智 |
| Citation | 臨床哲学のメチエ. 2003, 11, p. 46-47 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/10699 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



わせて7回の、計9回の授業を担当した。

阪大に来る以前に音楽雑誌の編集者をしてたという社会人経験を生かして、福井高での今回の授業では、「音楽を聴く」というテーマで二学期に2回、「小冊子を編集する」というテーマで二・三学期あ

「音楽を聴く」授業から少し経った後に担当した「小冊子を編集する」の授業では、編集作業で実際に用いられる手順や技術を教えるというよりも（これを彼らに教えてもあまり意味がないと思い）、編集という作業に特有の物事の捉え方、いわば「編集的な思考」というものに触れてもらうことを主眼に置いた。「編集的な思考」がどのようなものかと言えば、たとえばA、Bという相互にあまり関係のなさそうな2つのテーマ群に対し、A、Bを結びつける第3のCというキーワードやテーマを見つけ出して、Cを差し挟むことでAとBの間に新しい関係を作り出す、そうした思考法のことを考えている。具体的に言うと、授業ではまず最初、生徒たちに各自関心があり記事としてまとめたみたいテーマを1つ選んでもらった（テーマA）。挙がった

テーマは、音楽、ファッション、ペット、お笑い、興味のある仕事、など。次にこちら（講師）サイドから、小冊子全体の共通テーマとして、「0代」「ないし」「高校」という2つを設定し彼らに投げた（テーマB）。生徒の作業は、共通テーマのどちらかを選択し、先に選んだ自分の関心あるテーマと結びつけて実際の担当ページの企画を練る、ということになる。

最初のうち、何をすればいいのかわからないといった様子だったが、何度か説明するうちに彼らなりの企画が生まれてきた。ファッションをテーマに選んだ生徒は「福井高校のファッション・チェック」という企画を考え、ペットを選んだ生徒は「高校生でも飼える／買える小さくてかわいいペット」という企画を、仕事をテーマにした生徒は「なりたい仕事を見つげるために0代ですべきこと」をインタビューして聞くという企画を作った。冊子の企画を立てること自体、恐らく初めての経験だったろうが、彼らの企画はどれも「編集的思考」というこちらの意図を理解した上での優れたものだったと思う。

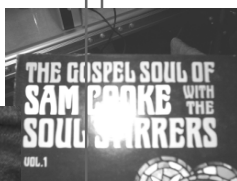
授業の流れとしては、企画立案後は、生徒一人につき2ページの担当ページを振り分け、企画に沿っての取材、写真撮影、原稿とりまとめ、ページのレイアウト／デザインなどの編集行程の各段階をすべて生徒に任せた。担当ページは最後まで自分で仕上げてもらって、岸田や他の阪大メンバーが原稿を書き直したり補ったりはしないと伝えると、次第に目の色が変わり、授業が終わりに近づいた頃には、

休み時間も休憩なしで作業を続ける姿が目立ち始め、時間内に騒いでいる生徒を生徒同士が注意する場面もあって驚かされた。理由は定かでないが、仲間内の

おしゃべりとクラス全体へ向けての発言に、以前ほどの落差がなくなっているようにも感じられた。講師が一方的に話す授業の形式ではなく、個別のアドバイスを中心にし、それを他の生徒にも聞こえるように行ったことで、生徒同志あるいは生徒と阪大メンバーとの間にある程度の理解が生まれたのかもしれない。

ただ、すべての生徒が自分の企画を記事に組み立てられたわけではない。いい企画を立てた

が取材が実現できず、企画の練り直しの段階に戻って記事作りを諦めてしまった生徒もいたし、最後までテーマAとテーマBを結びつけることができず、最終回の授業になってテーマを選び直した生徒もいた。仕上りのページとし



てうまく形になった生徒もいれば、そうでない生徒もいる。しかしいずれにしても、そのすべてが、彼らがこの授業期間中に試行錯誤した結果であると考え、小冊子に最終的にまとめるに当たっては、前言通り手直しをせず、彼らの文章とアイデアをそのまま掲載した。いい企画をいいページに仕上げられるに越したことはないが、今回の授業は編集者養成が目的なのではなく、普段の学校の勉強ではあまり使わない思考法を試すことを重視したので、仕上がりが多い不味くともさしたる問題ではないと考えている。それよりも彼らの懸命さを各ページに見たいと個人的には思う。見た目も悪く、文章も読みづらい小冊子だが、それだけに味のあるものが出来上がったのではないだろうか。

(きしださとし)